

氏名	プヨ・バティスト
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博乙第2849号
学位授与年月日	平成29年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	フランス語の名詞複数形に関する意味論研究

主査	筑波大学 教授	DL（言語学）	青木 三郎
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	沼田 善子
副査	筑波大学 教授	DL（文学）	増尾 弘美
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	渡邊 淳也
副査	上智大学 教授	博士（言語学）	TUCHAIS Simon

論文の要旨

本論文は、現代フランス語における名詞複数形の表す多様な表現価値に注目し、数量概念としての複数と言語形式としての複数形との関わりについて考察する。一般に数量概念としての複数、言及対象の外延のもつ可算性を前提とするが、フランス語の複数形という言語形式は、言及対象の内包のもつ多様性を指示するという仮説にたち、複数形の表す意味を再検討する。本論文では、名詞複数形を名詞レベルの分析のみならず、述語および冠詞の振る舞いを含む叙述レベルの分析を行うことで、複数形の多様な意味関係を明らかにする。さらに、フランス語の複数形がもつ内包性の観点に立ち、日本語の複数表現との比較対照的観察により、両語の複数概念の違いを明確にする。

本論文は序論と結論、および本論7章から構成される。序論では本論文の目的、考察の動機、各章の概要を述べる。

第1章では、文法における複数概念の定義について先行研究を批判的に検討する。先行研究において「複数」という用語が形態論上の「複数形」と、意味論上の「複数性」とをしばしば混同したまま論じていることを批判し、さらに、可算名詞の表す個体の累加を複数と考える従来の文法的考察の限界を指摘する。

第2章では、不定名詞句の単数形と複数形の用法を比較し、個体の累加による複数化という数量的な考え方を批判する。不定名詞句単数に関しては、例えば、**Il y a un ours dans le jardin.**（庭に熊（単数形）がいる。）という文では「熊がいる」という突飛な事件の出現を表すが、**Il y a des ours dans les Pyrénées.**（ピレネー山脈には熊（複数形）が生息する。）のように不定冠詞複数形を用いた文では、熊という動物の存在を記述するという違いがあることを指摘する。同様の例を多く観察することにより、名詞複数形が表すのは、個体の複数化ではなく、カテゴリーを構成する性質の多様化であることを主張する。

第3章では、定名詞句複数形の問題を扱う。一般に不定冠詞がカテゴリーの存在を指示するのに対して、定

冠詞はカテゴリーの内包を指示するという立場に立脚し、定名詞句複数形の総称的用法である *Les fantômes existent / n'existent pas*. (幽霊は存在する／幽霊は存在しない。) の名詞複数形の意味を論じる。非存在を前提とする幽霊が存在するという命題が論理的に矛盾する点について考察し、さらに主語名詞句 (*fantômes*) は複数形でなければならない理由は何かを論じ、定名詞句複数形 *les fantômes* が指示対象の複数性を表さないことを明らかにする。幽霊の存在論に関しては、先行研究を検討し、定冠詞は現実世界での幽霊の存在を指示するのではなく、幽霊という概念知識を指示することを論証する。定冠詞複数形でなければならない制約に関しては、幽霊という「種」が立ち現れる様々な姿や性質の多様性を指示するからであると説明する。

第4章では総称文における名詞単数形と複数形について、動詞述語が一時的状態を表す場合における制約を観察する。*Les femmes bavardent*. (女性はおしゃべりだ。) という定名詞句複数形の総称的解釈の例では、定名詞句を単数形 *la femme* に置換することはできない。この場合の *les femmes* は、任意に「女性 A／女性 B／女性 C」を取り上げ、女性の様々に想定できる特徴的振る舞いの中から、「女性のプロトタイプの行動」という特徴を記述すると論じる。

第5章では、定名詞句単数形と複数形の使い分けについて、目的語に注目し、主語定名詞句複数形との共通点について考察する。具体的には動詞述語 *sentir* (匂いがする／匂いを嗅ぐ) を取り上げ、定名詞句単数形 *la rose* と定名詞句複数形 *les roses* の違いを論じる。*la rose* (単数形) は、*Le mouchoir sent la rose* (ハンカチは薔薇の匂いがする。) のように、香水などの薔薇の特徴的な匂いを示し、必ずしも花としての薔薇の個性は問題にしない。複数形 *les roses* は、*La cuisine sent les roses* のように、様々な属性 (色、形、雰囲気等) をもつ薔薇の花を指示しており、動詞述語 *sentir* (匂いをかぐ) の目的語に配置されることにより、プロトタイプの薔薇の匂いという解釈となる。本章では、このような名詞句複数形の意味成立のメカニズムを明らかにする。

第6章は凝結表現における名詞複数形の機能に関して論じる。フランス語には名詞を複数形におくことによって凝結表現として解釈される場合が多いため、本章は、凝結表現における補語名詞の単数形と複数形のパターンを詳細に記述し、単数形と複数形の選択がどのような文法規則によって行われているかを考察する。凝結表現を補語名詞が無冠詞のもの (例: *porter secours* (救助する))、不定名詞句のもの (例: *poser un lapin* (約束をすっぽかす))、定名詞句のもの (例: *perdre le nord* (気が動転する)) に分類し、無冠詞補語を除き、不定名詞句補語と定名詞句補語における単数形と複数形の用法を対象とする。不定名詞句補語では、*se prendre une veste* (しくじる) を不定名詞句複数形 *des vestes* で表すと、同類の出来事の複数の生起を表すことになる。定名詞句補語では、単数形 *dire la chose* (何か特定のことを言う) に対して、複数形 *dire les choses* では、はっきり物事を言うという意味になる。これらの観察から複数化は、「多様な物事の中で一番意味のある、重要なこと」というように、指示対象の内包にプロトタイプの意味を与える、という結論を導く。

第7章は不可算名詞を取り上げ、その単数形と複数形の振る舞いの違いについて論じる。*sable* (砂)、*eau* (水) などの不可算名詞は単数形と複数形がともに用いられる場合があるが、その意味はかなり異なることが多い。それらを指摘した上で、単数形と複数形の解釈の違いについて観察し (例: *L'avion pénètre dans les sables du désert*. (飛行機は砂漠の中を飛行した。)/ *L'avion pénètre dans le sable du désert*. (飛行機は砂漠でクラッシュした。)) など、複数形が数量的な複数化を行っているのではなく、それぞれ異なる姿をとる砂漠の砂から構成される空間、すなわち広大な砂漠ゾーンとして捉えられると解釈する。本章の後半では、不可算名詞の複数形に関するメカニズムを明らかにすることで、数量的に複数性として捉えることの困難な日本語の量語複数形と比較を試みる。日本語の「山々、家々、木々、花々」といった量語複数形は、単数形を複数化するのではなく、対象を1つの連なりとして捉え、同時に連なる対象の個性にしたがって、それぞれ別の現れ方として理解する。この特徴づけにより、日本語とフランス語では対象の性質の多様化が異なるという点を明らかにする。

結論では、本論文の考察がまとめられ、本論文の意義と今後の研究の展望が述べられている。

審査の要旨

1 批評

本論文はフランス語の数概念と名詞複数形という表現形式の関係を論じたものである。日本語では対象が単数か複数かを明示的に区別する必要がないのに対して、フランス語ではその区分が不可欠である。フランス語と日本語の数概念はどのように違うのか。また、フランス語の不可算名詞は複数形で表される場合が多く、しかも誇張などの独特の表現効果をもつのは何故か。本論文はこのような疑問に答えるべく出発した研究であり、名詞における複数表示形式とその機能に関する考察から始め、不可算名詞の複数形の意味解釈、凝結表現における単数形・複数形等に関する考察を展開し、日本語の量語複数形との比較も論じている。複数形が「単数の表す個体の複数化」という外延に重きを置いた考えは大多数の研究の前提として受け入れられており、疑義を挟む余地はないように見える。しかし、本論文はその常識を批判的に捉え直し、複数形は複数それ自体を表すのではなく、名詞の表す概念の内包の多様化を表すという斬新な仮説を提案して、複数形の多様な意味の形成メカニズムを提示しており、この点にこそ本論文の独創性がある。

本論文の優れた点は以下の3点にまとめられる。第1点は言語事象の観察の鋭さと解釈の緻密さである。名詞複数形の解釈を的確に行うために、名詞レベル、名詞句レベル、述語レベル、文レベル、談話レベル、語用論レベル、テキストレベルを十分に配慮した観察が多く、本論文の主張の一貫性の基盤となっている。第2点は伝統的に文体論と修辞論で扱われてきた不可算名詞の複数形の意味解釈を、内包の多様化という点から統一的に説明したことである。これにより例えば不可算名詞 *eau* (水) の単数形 (*tomber dans l'eau* (川に落ちる)) と、複数形 (*tomber dans les eaux* (大波に巻き込まれる)) の違いに関して、複数形 *eaux* は特定の場所での水の多様な存在様態の表現であると理解できるようになる。第3点はフランス語の複数形の機能を通じて、日本語と比較する方法論を確立したことである。本論文では、全く発想の異なる2言語を比較可能にする視点として存在様態の多様化という考えを導入した。それにより、日本語の「山々」や「国々」などの量語複数形では、異なる様相・様態を含む対象を1つの連なりとして捉えるのに対して、フランス語の複数形では、均質な対象の中に多様な存在様態を区別して捉えるとする独創的な比較対照研究が可能となった。

以上、本論文はフランス語の観察、考察、仮説の独創性において極めて優れた研究であり、フランス語の緻密な個別研究から出発して、言語理論と対照言語学の方法に貢献する研究として評価できるものである。ただし本論文ではフランス語複数形の表現価値を体系的に論じたものではなく、特に数量限定に関わる不定形容詞 (*plusieurs, quelques* など) の振る舞いと制約、可算名詞、不可算名詞の定義に関する検討などの課題が残されている。しかし、これらの残された課題は、本論文の価値を損なうわけではなく、今後の研究の発展につながるものである。

2 最終試験

平成29年9月21日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第10条(1)に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。